

◆ 文献抄録

Postoperative pain and quality of life after lobectomy via video-assisted thoracoscopic surgery or anterolateral thoracotomy for early stage lung cancer: a randomised controlled trial

Bendixen M, Jørgensen OD, Kronborg C, et al

Lancet Oncol 17 : 836-844, 2016

はじめに：早期非小細胞肺癌に対する胸腔鏡下肺葉手術（VATS）は開胸肺葉切除術（Open）と比較して術後合併症を軽減し、低侵襲であると報告されているが後ろ向き研究の結果が多い。本研究では、術後疼痛と生活の質（QOL）に関するVATSの有用性をOpenと前向きに比較検討した。

方法：Public University-based Cardiothoracic Surgery Department in DenmarkにおいてI期非小細胞肺癌に対して肺葉切除術を予定した症例を対象とした。登録された症例は、ランダム化されVATS群とOpen群に振り分けて解析を行った。VATSは4 cmの小切開を含む4ポートで開胸器は使用せず、Openは16 cm長の前側方切開で開胸器を使用した。術後疼痛は、numeric rating scale（NRS）を在院中は1日6回測定し、退院後は外来で2, 4, 8, 12, 26, 52週に測定した。QOLはEuroQol 5 Dimensions（EQ 5 D）とEuropean Organisation for Research and Treatment of Cancer（EORTC）30 item Quality of Life Questionnaire（QLQ-C 30）を用い自己評価表の記載を集計した。Primary outcomeは中等度から重度疼痛（NRS ≥ 3 ）症例の割合、QOL scoreの平均値で評価した。

結果：2008年10月から2014年8月の期間に登録された症例をランダム化した結果、VATS

群102例とOpen群99例について最終解析を行った。術後24時間以内にNRS ≥ 3 であった患者の割合はVATS群で有意に低かった（VATS 38% , 95%CI 0.28-0.48 vs Open 63% , 95%CI 0.52-0.72, $p = 0.0012$ ）。術後52週までの間、NRS ≥ 3 の割合はVATS群で有意に低かった（ $p < 0.0001$ ）。EQ 5 DはVATS群で有意に良好（ $p = 0.014$ ）であったが、QLQ-C 30はすべての観察機関において有意差を認めなかった。術後合併症の頻度は2群間に差は認めなかった。

結語：前向き試験の結果からVATSはOpenと比較して術後疼痛が少なく、術後1年間のQOLの低下も少なかった。このことからVATSはI期非小細胞肺癌に対して肺葉切除を行うアプローチとして選択されるべきである。

【コメント】VATSの低侵襲性を評価する論文のほとんどが後ろ向き研究で患者選択のバイアスがある。本研究は、ランダム化比較試験を行った稀な報告である。ただし、単施設の研究であり、症例数が少ない、QOL調査票の回収率が60%と低い、長期予後の解析が必要、などのlimitationがある。真にVATSがOpenより低侵襲であることを評価するためには多施設共同のランダム化試験が必要である。

文 敏景（がん研有明病院呼吸器センター外科）